

## アウグステイヌス文学のヘブライ的地平

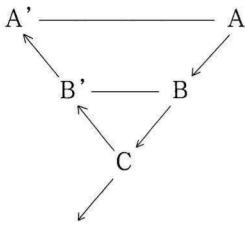
——『告白録』第一〜九巻における「キアスムス（交差対応的配列法）」構造——

宮本久雄

加藤信朗氏は、その著『アウグステイヌス『告白録』講義』において、『告白録』の「自伝的部分（第一〜九巻）」に対し独特な解釈法を示唆した<sup>(1)</sup>。

従来の自伝的部分の解釈は、第一巻、幼少年期の悪業、第二巻、青年期の放蕩、第三巻、真理へのめざめ、第三〜五巻、マニ教徒時代、第六巻、懷疑主義、第七巻、知的回心、第八巻、意志的回心という具合に読解した。その解釈法によれば、「これは一つの心理主義的な内省文学として『告白録』を読む読み方であり、哲学的彷徨型の読解<sup>(2)</sup>」なのである。これに対して氏は構成的解釈を提案する。すな

わち、自伝的部分は回心の過程であって、「神から離れてゆく〈離向 (aversio)〉の過程と神に帰ってくる〈帰向 (conversio)〉の過程から成る<sup>(3)</sup>」という具合に構成されているという。離向の過程は、第二〜四巻に幼少年期の悪業からマニ教への転落として描かれている。これに対し帰向の過程は、アンブロシウスとの出会も含め庭園における劇的回心に至る過程として第五〜八巻に描かれている。そして、神のもと（||母モニカの信仰）を起点とする第一巻と神のもと（||母モニカの信仰）にあることの喜びと平安を描く終点の第九巻とは、起点と終点として第二〜八巻をサンドウィッチのように挟み包み、第一〜九巻を一つの文学



単位として構成するわけである。(4) こうした文学的括り構造自体は、ヘブライ文学によく見られる括り (inclusio) であるといえる。

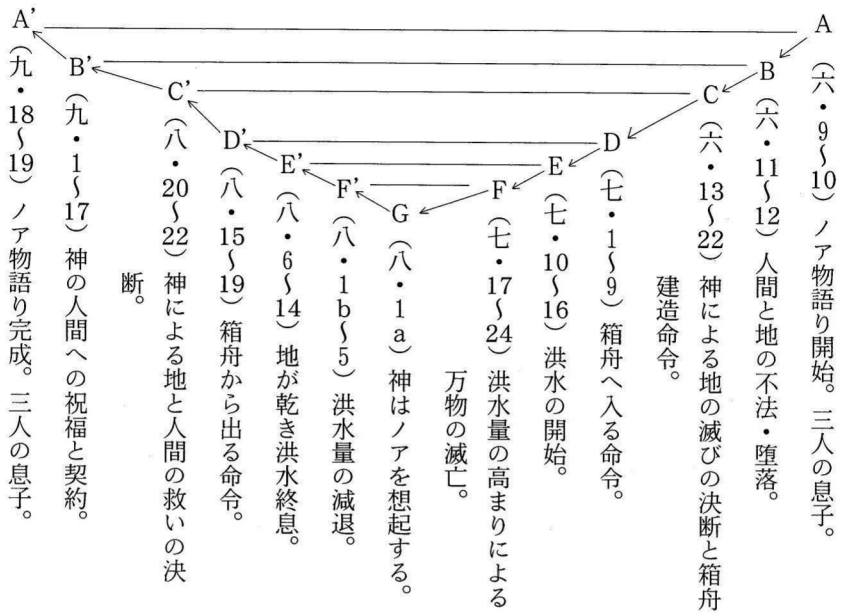
さてわれわれは、以上のような加藤氏の構成的解釈に基づきそれに示唆を与えられつつ、この自伝的部分の文学的構造全体に、ヘブライ的文学でよく用いられるキアスムスを洞察したのである。

それではキアスムスとは、どのような文学的手法あるいは構成法なのであろうか。

まず形式的に、その文学的表現構造を簡単に図示し解説してみよう。A、Bなどアルファベットはある文章単位を表わす。

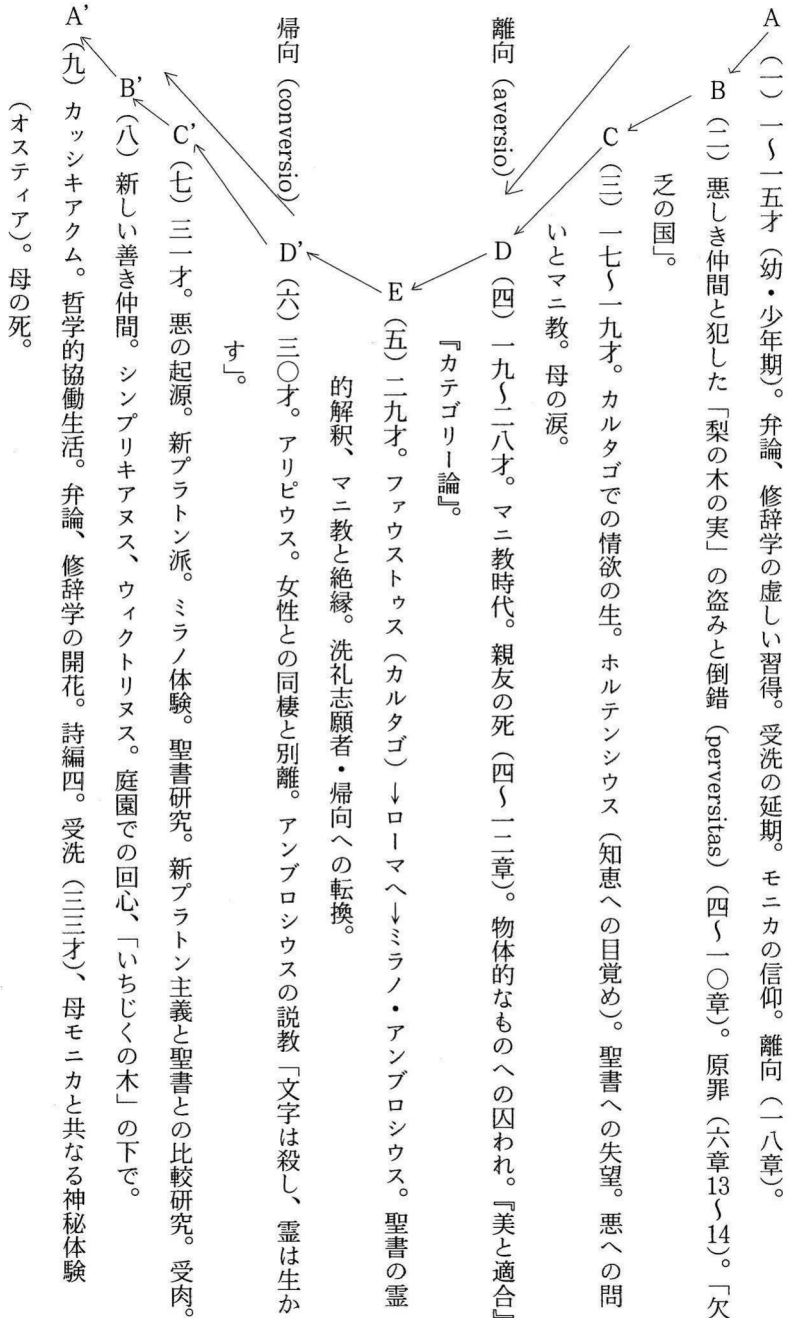
上の図において、表現の筋は、 $A \downarrow B \downarrow C \downarrow B' \downarrow A'$ と流れてゆく。その際、 $A \downarrow C$ の方向の筋立ては、 $A' \downarrow C$ 方向の筋立てとCで交差する。そしてAとA'、BとB'は、表現や内容の点で対応あるいは逆対応する。そして全体の表現はAとA'で括られて一つの文学単位をなす。そして多くの場合、物語りの筋の核心や中心の意味は、Cに収斂して表現されるのである。これがキアスムス、つまり、Cを中心としてCでAB方向とA、B方向が交差し、AとA'などが対応し、一つの文学的物語りの構造をなす交差対応的配列法である。

われわれは、紙幅の都合から新約の例を省いて、旧約文学からキアスムスの一範例を示したい。テキストは、ノアの洪水物語り (「創世記」六章九節〜九章一九節) である (以降章節は、六・9〜九・19のように表記する)。(5)



ノアの洪水物語りは、AとA'で括られて上図のように展開する。その全体構造や対応・逆対応関係は、先述のキアスムス解説を参考にして読者子が点検していただきたい。ただしこの物語りで核心的な点は、Gにおける、神によるノア想起である。神による想起(ZIKKARON, anamnesis)こそ、旧約の歴史のカイロスを創る(たとえば、「出エジプト記」二・25、一三・3など)。なぜなら、洪水物語りの場合、この神の想起によってノア契約が結ばれ、人類の新時代(B')が始まるからである。

この点は今は立ち入れないが、われわれは『告白録』の自伝的部分に、上述のようなキアスムス構造を読み取る時にいたった。そこで加藤氏の離向と帰向の構成的解釈を参照しつつ、まず結論的に自伝的部分のキアスムスを図示してみたい。その際、各アルファベットの下の漢数字は、この自伝的部分の巻数を表示する。その下には、各巻の主要テーマが大略記されている。それでは次に『告白録』第一～九巻におけるキアスムス構造図を見てゆこう。



前頁の図において自伝的物語りの筋立ては、A↓Aに即して明らかであろう。そこで次に対応関係について説明したい。

Aでは、アウグスティヌスの幼・少年期が語られ、弁論術や修辞学の勉強が出世のために親に強制されたこと、モニカの信仰の下にあったが、まだ信の成熟には程遠かったこと、受洗の延期、『アエネイス』物語などの文学的幻想に夢中になり、「神の御顔」から離向し始めたことが語られている。これに対してAでは、立身出世のための修辞学教師の辞任、逆にカッシキアムでの討論と哲学的著作において修辞学、文法学などの過去の習得が生かされたこと、詩編四により神への立ち返りの深化、受洗、そしてオステイアにおける母モニカとの信仰の交わりとその深まりの極みとしての「知恵そのもの」の体験が語られ、AがAにおいて止揚されたこと、つまり離向から帰向への還帰とその成就とが描かれている。こうして自伝的物語りは、AとAとによって括られ、一つの文学単位を成していることが読みとれるのである。

Bでは、悪しき仲間との交流と「創世記」の善悪の木の

実の盗みを解釈学的下敷きにした梨の木の実の盗みが描かれる。そして、その盗みの倒錯的性格の分析とその倒錯が正しく「神のごとくになる」(「創世記」三・5)という原罪的転倒であること、その結果「欠乏の国」で悲惨な生を送っていることが述べられる。これに対してBでは、新しき善き師や仲間(シンプリキアヌス、ポンティキアヌス、アリピウス、ネブリディウスなど)との交流、根源悪の分析(転倒した意志が情欲を生み、その情欲が習慣化されて必然と化すこと、五章10)、その根源悪からエデンの園を示唆する「庭園」で、善悪の木を思わせる「いちじくの木」の下で回心したことなどが語られ、Bの離向が帰向に転換止揚されているのである。

以下、CとCの離向から帰向への筋立てとそこにおける対応関係については、これ以上詳細に解説する必要はないであろう。その作業は、読者子にお委ねしたい。

ただ離向から帰向へ転換する筋立ての収斂点であるE(第五巻)について簡単に言及しておこう。第五巻一―三章では、離向と帰向の構造が告白的言語行為を媒介にして表白されている。その構造をアウグスティヌスの言葉を引用しつつ示したい。(1)こと(帰向の事・言)は次の言葉を以

て始まる。

一、わが告白のいけにえを、わが舌の手よりうけとりたまえ。……わが魂は、御身を讃えんために、そのかずかずの憐れみを告白せよ。……かくてわれらの魂は、無気力の状態（離向の悲惨）から御身にむかつて起きあがり、御身にむかつて上昇してゆくであろう（帰向）。

二、心さわぎ不義なる人々は御身から逃げさってゆくがよい。……彼らは逃げていった（離向）。そのために彼らは、自分を御身に見られながら、御身を見ずに盲目となり、御身につきあつた——御身はその造りたもうた何ものをもすてさるゝことがないから——。それゆえ彼らはたち返つて、御身を探さねばならない。そのとき御身はまさしくそこに、彼らの心の中にまします。御身に告白し……御身のひざもとで泣く人々の心のうちにまします。……彼らはますますはげしく泣きながら、その嘆きのうちによるこびを感じる（帰向）。

こうした離向↓帰向を語る、いわば「序」に続いて五巻では、アウグスティヌスが、カルタゴからローマに到り、そこからミラノに到着するという地理的転換が語られる。その転換は、アウグスティヌスの意志だけに拠らず、むしろ

「魂の救いのために地上の住所を変えるべく、私を棒でつき動かしたのは（あなた）」（八章14）に拠っているのである。このことは、彼が情欲のサルタゴ（大鍋）であるカルタゴから懷疑に満ちるローマを通過し、ミラノに達した地理的転換は、彼の回心にとつて決定的撰理的であることを示す。それは次の二点において、であつたと思われる。一つは、カルタゴにてマニ教の代表的な教師ファウストゥスと出會つてマニ教に幻滅しやがて離教したという点である。というのも、アウグスティヌスは、マニ教の教える物体的表象の世界に閉じ込められていたので、聖書の文字通りの世界に囚われて靈的意味の解釈に至らなかつたからである。第二点は、その解釈的限界を開放してくれたのが、ミラノでのアンブロシウスとの出會いだったのである。「文字は殺し、靈は生かす」という解釈法を通して、彼は聖書の世界に入ることができ、洗礼志願者として残りえたのである。とすれば、Eにおいて聖書の象徴的解釈がその後のアウグスティヌスの帰向の生に決定的な出発点をなしていることが示されているといえよう。

以上が『告白録』の伝記的部分に関するキアスムスの洞察であり解説である。としても、人はラテン人アウグステイ

ヌスの文学に、なぜヘブライ的文学用法をうかがうのかということを依然不審に思われるかもしれない。

しかし、われわれはアウグスティヌスが、旧新約全聖書をほぼ暗記に近いほどに熟知し、聖書の言葉が彼の身にしみこみ彼の身体（のリズム）そのものに受肉していることを知っている。とすれば、身体を張って生きたアウグスティヌスが、聖書のヘブライ的言語用法を『告白録』の著作において、その身体的行為として表わすのも自らなることなのである。その意味で、アウグスティヌスの言語表現において、今後ヘブライ的用法が洞察されることが期待されるのである。われわれ自らの帰向の歩みにおいて。

### 註

- (1) 本論は、二〇〇七年一〇月に聖心女子大学で開催された『アウグスティヌス『告白録』講義（以降「講義」と略記する）』書評会を念頭においている。
- (2) 「講義」八九頁。
- (3) 同右。
- (4) 「講義」九〇～九一頁。
- (5) 新約の一範例として「ルカ福音書」二四章一三～三五節の

「エマオの弟子たち」のテキストを挙げておこう。拙著『いのちの記憶—受難と魅りの証言』新世社、二〇〇七年、三二五～三三三頁。さらにこのテキストを研究されたい方は、次著を参照。Seur Jeanne d'Arc, *Les Pèlerins d'Emmaüs*, Les Editions du Cerf, 1982.

(6) このテキストのキアスムス的解釈は、二、三あるが、われわれが参照した論文は次のものである。Anderson, B.W., "From Analysis to Synthesis: The Interpretation of Gen.1-11," in *Journal of Biblical Literature* 97, (1978) pp.23-39.

(7) 全文を山田晶訳を用いさせていただいた。

(8) 聖書解釈が即自己変容の道行きであることに關しては、拙著『愛の言語の誕生』新世社、二〇〇四年を参照されたし。

## 教父研究会活動報告

(二〇〇八年六月～二〇〇九年一〇月)

### 第二二四回教父研究会

二〇〇八年六月二一日(土) 聖心女子大学

土橋茂樹氏「バシレイオス―エウノミオス論争における問題の所在―」

### 第二二五回教父研究会

二〇〇八年十月一八日(土) 上智大学

樋等勝士氏「アウグスティヌスにおける〈音楽〉の概念―『音楽論』を通して―」  
名須川学氏「アウグスティヌス数理思想の一七世紀における影響―マラン・メルセンヌのハルモニア論をめぐって―」

### 第二二六回教父研究会

二〇〇八年二月一三日(土) 明治学院大学

戸田 聡氏「キリスト教修道制の成立―隠修制と共住制―」

桑原直己氏「隠修士と共住修道院―その東方的起源と西方的展開について―」

### 第二二七回教父研究会

二〇〇九年三月二八日(土) 聖心女子大学

宮本久雄氏「身体を張る(extendere)アウグスティヌス」

### 第二二八回教父研究会

二〇〇九年六月二七日(土) 聖心女子大学

高橋 涉氏「擬ディオニュシオスのキリスト論」  
袴田 玲氏「神の光を見ることをめぐって」  
―グレゴリオス・パラマスの擬ディオニュシオス解釈―  
北川 恵氏「音楽による魂の上昇について―『音楽論』第六巻―」  
横田蔵人氏「アウグスティヌスを逆から読む」  
―『三位一体論』における実体の相互内在について―

●同日、研究発表に先立ち、総会が開催された。



第一二九回教父研究会

二〇〇九年九月一九日(土) 聖心女子大学

谷隆一郎氏「神的エネルギー・ Pneuma の経験と信

— ロゴス・キリストを信じるとはいかなることか —」

教父研究会役員

名誉会長 加藤信朗

会長 宮本久雄

運営委員 加藤信朗・柴田 有・宮本久雄・水落健治・

荒井洋一・土橋茂樹・出村和彦

事務局 編集担当 田子多津子

会計担当 佐藤真基子

庶務担当 田内千里・長峯素真生・袴田 玲

事務局所在地

〒一九二・〇三九三

東京都八王子市東中野七四二・一

中央大学文学部 土橋研究室

編集後記

連日厳しい経済情勢にかかわる報道がなされるなか、本会も相変わらず厳しい会計事情にありますがおかげさまで本誌第十三号を発行することができました。表紙を一新してから早くも三号を数えることになりました。関係者の方々に御礼を申し上げます。

今号は、奇しくも修道制とアウグスティヌスの特集号のような興味深いラインナップとなりました。これも当研究会ならではのことかと思えます。加藤信朗氏著書の書評会の記録につきましては、二年越しの分割掲載となつてしまい、読者の皆様にご不便をおかけすることになってしまいましたこと、お詫び申し上げます。しかし、当日時間的制約でご発言を控えられた宮本氏のコメントを掲載することができましたことを多としたいと思います。

本誌十三号の発行にあたって、引続き新世社の中山訓男氏のご協力を得られましたことをご報告申し上げます。現下の厳しい出版状況の中で、中山訓男氏の教父研究会に対する深いご理解とご協力に心より感謝いたします。

(第十三号編集担当幹事 田子多津子)